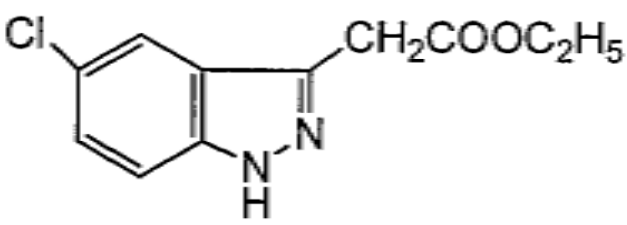


エチクロゼート

I. 評価対象農薬の概要

1. 物質概要

化学名	エチル=5-クロロ-3(1 <i>H</i>)-インダゾリルアセート				
分子式	C ₁₁ H ₁₁ ClN ₂ O ₂	分子量	238.7	CAS NO.	27512-72-7
構造式					

2. 作用機構等

エチクロゼートはオーキシン活性を有する植物成長調整剤であり、その作用機構は本剤により適用作物においてエチレンの生成が誘起されることによるものと考えられている。本邦での初回登録は1972年である。

製剤は乳剤が、適用作物は果樹及び野菜がある。

3. 各種物性

外観	白色粉末、無臭	土壌吸着係数	土壌中で速やかに分解するため測定不能
融点	76.3 - 77.4℃	オクタノール／水分配係数	logPow = 2.5(40℃)
沸点	約240℃で分解するため測定不能	生物濃縮性	-
蒸気圧	6.09 × 10 ⁻⁵ Pa (25℃)	密度	1.4 g/cm ³ (20℃)
加水分解性	半減期 >1年 (pH4、25℃) 約105日 (pH7、25℃) 181日 (pH7、25℃) 約2.8日 (pH9、25℃) 2.3日 (pH9、25℃)	水溶解度	1.9 × 10 ⁵ μg/L (20℃)

水中光分解性	半減期
	0.2日 (滅菌蒸留水、25°C、450W/m ² 、300-800nm)
	0.3日 (東京春季太陽光換算 1.4日) (滅菌蒸留水、25°C、450W/m ² 、300-800nm)
	1.2日 (東京春季太陽光換算 5.3日) (滅菌自然水、25°C、450W/m ² 、300-800nm)

II. 水産動植物への毒性

1. 魚類

(1) 魚類急性毒性試験 (コイ)

コイを用いた魚類急性毒性試験が実施され、96hLC₅₀ = 4,610 μg/Lであった。

表1 コイ急性毒性試験結果

被験物質	原体					
供試生物	コイ (<i>Cyprinus carpio</i>) 10尾/群					
暴露方法	半止水式 (暴露開始 48 時間後に換水)					
暴露期間	96h					
設定濃度 (μg/L)	0	163	816	4,080	5,710	8,000
実測濃度 (μg/L) (時間加重平均値)	0	137	723	3,590	5,230	7,300
死亡数/供試生物数 (96hr 後; 尾)	0/10	0/10	0/10	0/10	8/10	7/10
助剤	なし					
LC ₅₀ (μg/L)	4,610 (実測濃度 (有効成分換算値) に基づく)					

2. 甲殻類

(1) ミジンコ類急性遊泳阻害試験 (オオミジンコ)

オオミジンコを用いたミジンコ類急性遊泳阻害試験が実施され、48hEC₅₀ = 24,300 μg/Lであった。

表2 オオミジンコ急性遊泳阻害試験結果

被験物質	原体					
供試生物	オオミジンコ (<i>Daphnia magna</i>) 20頭/群					
暴露方法	止水式					
暴露期間	48h					
設定濃度 (μg/L)	0	9,530	17,100	30,900	55,600	100,000
実測濃度 (μg/L) (時間加重平均値)	0	9,080	16,400	29,600	53,400	95,700
遊泳阻害数/供試生物数(48hr後;頭)	0/20	0/20	0/20	18/20	20/20	20/20
助剤	なし					
EC ₅₀ (μg/L)	24,300 (95%信頼限界 16,900-30,600) (設定濃度(有効成分換算値)に基づく)					

3. 藻類

(1) 藻類生長阻害試験

Pseudokirchneriella subcapitata を用いた藻類生長阻害試験が実施され、72hErC₅₀ 10,500 μg/Lであった。

表3 藻類生長阻害試験結果

被験物質	原体					
供試生物	<i>P. subcapitata</i> 初期生物量 1.0×10 ⁴ cells/mL					
暴露方法	振とう培養					
暴露期間	72 h					
設定濃度 (μg/L)	0	512	1,280	3,200	8,000	20,000
実測濃度 (μg/L) (時間加重平均)	0	445	1,110	2,750	7,010	17,700
72hr後生物量 (×10 ⁴ cells/mL)	87.6	89.2	83.3	55.7	17.7	2.26
0-72hr生長阻害率 (%)	/	-0.286	1.10	10.2	36.0	81.8
助剤	なし					
ErC ₅₀ (μg/L)	10,500 (設定濃度(有効成分換算値)に基づく)					
NOECr (μg/L)	1,270 (設定濃度(有効成分換算値)に基づく)					

Ⅲ. 環境中予測濃度 (PEC)

1. 製剤の種類及び適用農作物等

本農薬は製剤として乳剤があり、果樹及び野菜に適用がある。

2. PECの算出

(1) 非水田使用時の水産PEC

非水田使用農薬として、水産PECが最も高くなる使用方法について、下表のパラメーターを用いて第1段階の水産PECを算出する。

表4 PEC算出に関する使用方法及びパラメーター
(非水田使用第1段階：河川ドリフト)

PEC算出に関する使用方法		各パラメーターの値	
剤型	20%乳剤	I : 単回の農薬散布量 (有効成分 g/ha)	1,000
農薬散布量	500L/10a	D_{river} : 河川ドリフト率 (%)	3.4
希釈倍数	1,000倍	Z_{river} : 1日河川ドリフト面積 (ha/day)	0.12
地上防除/航空防除	地上	N_{drift} : ドリフト寄与日数 (day)	2
適用作物	果樹	R_u : 畑地からの農薬流出率 (%)	0.02
施用法	散布	A_u : 農薬散布面積 (ha)	37.5
		f_u : 施用法による農薬流出係数 (-)	1

これらのパラメーターより非水田使用時の環境中予測濃度は以下のとおりとなる。

非水田 PEC _{Tier1} による算出結果	0.016 μ g/L
----------------------------------	-----------------

IV. 総合評価

(1) 登録保留基準値案

各生物種の LC_{50} 、 EC_{50} は以下のとおりであった。

魚類（コイ急性毒性）	$96hLC_{50}$	=	4,610	$\mu g/L$
甲殻類（オオミジンコ急性遊泳阻害）	$48hEC_{50}$	=	24,300	$\mu g/L$
藻類（ <i>P. subcapitata</i> 生長阻害）	$72hErC_{50}$	=	10,500	$\mu g/L$

これらから、

魚類急性影響濃度	$AECf = LC_{50}/10 =$	461	$\mu g/L$
甲殻類急性影響濃度	$AECd = EC_{50}/10 =$	2,430	$\mu g/L$
藻類急性影響濃度	$AECa = EC_{50} =$	10,500	$\mu g/L$

よって、これらのうち最小の $AECf$ より、登録保留基準値 = 460 ($\mu g/L$) とする。

(2) リスク評価

環境中予測濃度は、非水田 $PEC_{Tier1} = 0.016$ ($\mu g/L$) であり、登録保留基準値 460 ($\mu g/L$) を下回っている。

<検討経緯>

2011年6月10日 平成23年度第1回水産動植物登録保留基準設定検討会